
世界水槽論

ホルン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界水槽論

【Nコード】

N8472M

【作者名】

ホルン

【あらすじ】

「世界は水槽みたいね」

彼女はそういった。ぼくはなんと答えればいい？

ああ、誰か僕に普通と普通だった彼女をください。切実に。

（前書き）

微妙にこの世界を否定するような語句があります。苦手な方はご観覧をお控えください。

小説に書きなれていないので、誤字、誤植がございましたらご連絡をいただけるとありがたいです。

大変不慣れではございますが、温かな目で見守ってくださいることを
お願い申し上げます。

「ねえ、この世界は水槽で出来てたりして」
「は？」

彼女は突然そんなことを言い出した。開いた口がふさがらないとはまさにこのこと。彼女が、僕に対して理解に苦しむことを言うのはこれが初めてではないのでそこまで驚かなかった。それに、僕もそろそろ彼女の言葉には態勢がついただろうと思ったときに、世界単位でこんなことを言われた。頭がついていけない。その前に何故こんな唐突にモノを言うてくるのだろうか、唐突に言うものだから僕も心の準備と頭の準備ができていない。

「ねえ、聞いてるの？」
「あ、聞いてるよ。えっと、なんでそう思ったの？」

とりあえず聞いてみた。彼女を膨らませていた頬をしばませ、僕のほうを向く。……見かけだけなら普通の女の子なんだけどね。説明が遅れたが、今、僕の目の前にいて僕が理解に苦しむようなことをいう彼女は僕の交際相手だ。ちなみに籍は入れている。子持ちではない、断じて。まあ僕たちは成人して、お互いそろそろ相手を見つけないければならないと思ってお見合いをしたところ、意外にも趣味などが合ったりなどして二人の意見が一致し、籍を入れることになった。というのが一連の流れだ。これはおいておくでしょう。僕は彼女に何故そう思ったのかを聞いてみた。すると彼女は吃驚した目で、今まで思ったこともなかったの、といたいような目をして僕を見た。失礼な、僕は彼女と違っていたって普通の男子だ。

「だって、水槽の中ってこの世界に似てるじゃない。それにこの間、

友達の家に行つて金魚を見たときに思つたの。“私たちに似てるな”つて」

「どうして似てると思つたの？」

「私たちは“宇宙”という水槽の中の“地球”という玩具の中で遊ぶといつたらいいかしら、まあそこに住まうサカナのようじゃない。地球の中から出る資源を出るだけとつて、なくなつたらまた別の星へ、まるで玩具に飽きたサカナが別の玩具で遊ぶようだね。それにガラスには重力なんてないでしょうけど、水槽の中には水、つまり水圧という名の重力があるのよ？ ほら、まるで地球みたいじゃないそれにサカナにも色々種類があるでしょ？ 多分それは他の生物よ。私たちが掘り漁っている資源はその水槽の持ち主から与えられる餌。海とか湖は水槽内の水が少し見えるのね。宇宙の無重力はきつと水の中にいるからそう感じるだけ。私たちに限界があるとおり、水槽にも限界があるわ。だから最近世界情勢がおかしいのよ。戦争はきつと何かの割れ目よ。虫の知らせっていうのかしら。そんな感じよ。どう？」

彼女は首をかしげて僕を見る。……可愛いなコンチクショー。彼女は長々と説明したわりには息切れ一つしていない。……彼女に限界はあるのだろうか。むしろ彼女こそその水槽の持ち主ではないのかと思つてしまう。

「どう、つて言われても君は賢すぎて凡人の僕には理解しかねない

「それよ！」

彼女はいきなり僕のセリフを遮つて僕を指差す。目の前にあるものだから少し怖い。そう思つた自分に情けなさを感じた。

「日本人だからかもしれないけど、謙虚な姿勢とすべての人類にあ

るちょっとした優越感！ 動物の世界そのものよ！ 凡人という鎖で自分を縛って考えることもしない、強者は強者、弱者は弱者って決め付けてるところが水槽の中にいる証拠よ！」

「あのね、謙虚なのは日本の国民性なの。というかそれで世界が成り立ってるんだからしょうがないでしょ」

「そのしょうがないも結局は自分で決めた鎖じゃない。だからサカナなのよ、私たちは」

鎖、僕はそんなつもりで言ったんじゃないんだけど、彼女にはそう聞こえたみたいだ。それよりサカナって言われたよ。全人類に対して。

「でも、水槽じゃないのが現実なのよ。皆が同じだったら誰も悲しまないし、誰も死なない。いつも同じ時間に同じ事して、言葉なんか交わさないで、個性なんて出せなくて、だから平等って言ったって平等じゃない。なんで神様はこんな面倒臭い世界を作ったんだろう。地球で狭い玩具おもちゃの中で、たくさんオモチャの国に分けて、州に分けて大陸に分けて、だから戦争なんて起こるのよ」

彼女はうつむいた。ああ、彼女が唐突に話してくることが繋がった。最初は人類について、次は死後の世界のこと、その次は昔の歴史、先祖、国、地球、そしてこの水槽論。今日は二つ聞いた。この水槽論と彼女の本心。きっと彼女は不安だったんだ。負の感情が心に溜まると精神が不安定になるらしい。彼女が話したあとは決まって懺悔などだ。

「…… 怨念は、より深い怨念を呼び、憎悪は憎悪を生み、願望は私欲に変わり、復讐は更なる復讐を呼ぶ。人間って面倒臭いわ。やってられない」

「でも、そんな人間が大好きなんだろう？」

「ええ、そうね」

彼女と僕は二人、笑いあった。

「あー!!! 書けない! 書けない!」

先生はいきなり叫びだした。これは私でも吃驚する。あ、先生とは私の目の前にいる小説家の先生で、ただ今スランプ真っ最中らしいです。

「どうしたんですか先生!？」

「世界水槽論って何? あー書いた僕自身が分からなくなってきた!」

「? 世界、水槽論、ですか? いいタイトルですね。“まるで私たちみたい”です」

「……そだね」

先生はやられた、という顔をしながら原稿に向かい文字を並べていく。私は先生の書くお話が好きで助手をやらせてもらっている。ファンタジー、純文学、恋愛、推理、ホラー、たくさんのお話を読んだけど、先生の書く小説はどれも筋が通っていて、それでいてワクワクさせるような、子供心が帰ってくるような小説で私は好きだ。でも、そんな先生がテーマを決めて小説を書くようになってからというもの、中々心が躍らない。先生はきつと縛られたらいけない人なんだな、と思う。まあ助手の私が言えることじゃないけど。

「どうしよう! これじゃあ次のテーマ部門の提出日に間に合わないよー!」

「先生、テーマはなんなんですか?」

「えっと、確か弱肉強食」

「なんですか、難しいの出してきてるんですかあの会社。私ちよつと殴りこみに行つて来ます」

「やめてっ僕のライフラインが断たれるからやめて！」

やっぱり先生は縛られちゃいけない先生だと思えます。縛られる先生の作品は、どれも私の心を揺さぶってはくれませんでした。だから。

「先生、私は先生の自由な小説が大好きです」

本当のことだけは言わせてください。

(後書き)

世界水槽論、どうでしたか？

皆様のご期待に沿っていれば嬉しい限りです。

これは私がすこし思ったことをそのまま書いてみました。反感などは受け付けます。

個々の意見があるから世界は成り立っていると思います。皆様の考えをお聞かせください。今後の参考にさせて頂きたいです。最後に、ご観覧いただきまことにありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8472m/>

世界水槽論

2010年10月11日20時43分発行